

伊那谷スケッチ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第四十二回



前島久美

数年ぶりに梅雨らしい梅雨だった。そのため、ドロオイの繁殖には（正式名称：イネドロオイムシ）にとっては好条件のようでミゾゴイ米の圃場は彼らの被害にあって白くなってしまっている。ドロのように見えるのは自分の糞で、これを背負って害虫から身を守ったり、体を保温しているらしい。比較的寒冷な地や山間地に多く発生するという。稲が白くなっている部分が食べられた跡で、田植え直後の柔らかい稲の葉

を好んで食べる。これまでの観察によると梅雨に入って湿気が出始めると増えてきて、梅雨明けで日が照り始める7月中旬辺りには成虫になる時期と重なるのか食害は少なくなる。今年は彼らが大発生して、一面ほぼ葉を斑に白くしている。虫だけではなく草もこの天気で良く育つので右手で草をとり、左手にオニグルミ葉っぱを持ち、ドロオイを拭うという所作を繰り返す日々。環境とは良くした物で、この地域によく

自生するオニグルミの葉っぱは粘性がありドロオイのうんちに接触すると葉っぱにくっつくことになる。

農薬を使って防除する場合は、田植え直前の苗箱に50~100gほどパラパラと粒剤を撒く。農薬会社のサイトにあった説明書きによると、ドロオイ虫のほか、イネハモグリバエ、ツマグロヨコバイ、コブノメイガ、イネミズゾウムシ、スクミリンゴガイ、ニカメイチュウ、イネゾウムシなどもあわせて防除できるようだ。便利なものだ。ほとんどの農家がこれに頼っている。しかし、私達のミゾゴイ米は、酪農や稻作といった人間が作り出す環境に好んで居着くミゾゴイ（絶滅危惧種の渡り鳥）の生育環境を守る為に無化学肥料、無農薬で栽培している。だから今年も薬は一切使っていない。昔ながらの農法は野生生物には優しいかもしれないが、人間のからだ（筋骨格）には優しくない。

「環境にやさしい持続可能な農業」と言えば響きはいいが、環境にはやさしくても人の体には優しくない。あと何年くらい、手植えや、手刈りの稻刈り、はざかけが出来るだろうかと思う。年齢と共に大変になっていくことは目に見えているので、田植機や脱穀機の購入も徐々に導入することを考えたほうが現実的だろう。今のところ私達のお米作りは代掻きと脱穀は機械におまかせしたものの、お米にするまでがどれだけ大変かということを身をもって知った。今でも精米機にかける時、あの箱の中で精米された米とぬかと糲がどうやって分別されるのだろうと、不思議だ。昔だったら足踏み脱穀、篩（ふる）い、唐箕、筵（むしろ）に広げての再乾燥、糲すりといった気が遠くなるような作業があったのであろう。

シオデという山菜がある。天然のアスパラと言われ日当りの良い草地に5月の下旬から目に

つくようになる。つる性の植物だ。天ぷらやおひたしにするとややぬめりのある食感が楽しめる。シオデは近所のおじさんの畑の斜面の草地で採れるので毎年そこは採取スポットになっている。しかし今年はばっちり除草剤をまかれてしまい、貴重な採取ポイントを失ったのだ。体力的に草刈り機を使えなくなったら農薬をまくようになり、それも出来なくなつたらよいよ草むらになる。

地元の昔ながらの人達は、躊躇なく農薬（除草剤や殺虫剤）や化学肥料を使う。そうしないと間に合わないからだ。何に間に合わないのか・・・・今だったら雑草が育つサイクルや生活のなかの稼ぎと儲けのバランスだろうか。それから、人からどういう風にみられるか、と言うポイントも外せないところだろう。草むらにしておくより、除草剤を使って「ちゃんと管理してますよ」感を出す方に重きをおく人もいるだろう。

昔、といつても4、50年前は人の「手」が豊富にあった。農業は主食をつくる基幹産業で、父母が主力を担い、手のかかる仕事はじいちやんばあちゃん、子どもたちを総動員してやった。いまはその「手」も必要な時にすぐには揃わない。子供たちは農業よりずっと儲かる産業に就職し、あるいは条件のよい就職をするために塾やらなんやらで忙しい。一部の専業農家を除き、農業はもっぱらじいちやんばあちゃんたちの仕事だろう。

大鹿村のような山間地では土地の維持管理の為に農作物を育てているのがほとんどだ。人の「手」がないなら機械、農薬、化学肥料に頼らざるを得ない。働いて得た金で高い機械を買う。そして農薬や肥料を買う。それが今の農村（特に中山間地域）の圧倒的多数派だ。そうしないと農業を続けられない。「持続可能な農業」では持続できないというのがリアルな現実だ。